

総 則

1 生徒の主体的な学びを実現する教育

(1) 高等学校において顕在化している課題

高等学校では、令和4年度から年次進行で現行学習指導要領（平成30年3月告示）が実施されており、全日制課程では令和6年度、定時制課程では令和7年度末で完成を迎える。現行学習指導要領の理念や趣旨が学校現場に浸透しつつある一方で、現在の高等学校には、どのような課題が顕在化しているのだろうか。本手引では、令和6年12月25日に文部科学大臣が中央教育審議会に諮問した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」において、「学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供が多くなっていること」が、課題の一つとして示されていることに着目した。



【諮問 [概要 P 1](#)、[本編 P 2](#)】



【参考：[中央教育審議会初等中等教育分科会
教育課程部会 教育課程企画特別部会 論点整理](#)】

現行学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を理念として掲げ、全ての教科等を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの資質・能力の柱で整理している。また、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」を明確化するとともに、「どのように学ぶか」の重要性を強調し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の必要性を示している。

そのため、学校全体で生徒の主体的な学びの実現を推進することは極めて重要であり、全ての教師が「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に積極的に取り組むことが不可欠である。是非、過去に発行したものも含め、本手引の各教科編（<http://www.koukou.hokkaido-c.ed.jp/tebiki/kyouikukatei-mokuji.htm>）を参考にいただき、不断の授業改善に取り組んでいただきたい。

なお、本手引では、学校全体で生徒の主体的な学びの実現を推進している事例を掲載している。本事例を参考にすることで、各学校で現在行っている教育活動を点検・再整理し、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの充実につなげていただきたい。

(2) 主体的な学びを実現するためには

急激に変化する時代においては、生徒一人一人が、複雑で予測困難な社会の変化に対して受け身の姿勢ではなく、変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせて、より豊かなものにすることが必要である。そのため、次代を切り拓く生徒には、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある

存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えていくことが求められている。

そのために必要となる具体的な資質・能力には、例えば次のようなものが挙げられる。

＜複雑で予測困難な社会において求められる資質・能力＞

- ・文章の意味を正確に理解する読解力
- ・教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力
- ・対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力 など

＜どのような時代であっても変わらず重要な資質・能力＞

豊かな情操や規範意識／自他の生命の尊重／自己肯定感・自己有用感／他者への思いやり／対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力／困難を乗り越え、ものごとを成し遂げる力／公共の精神の育成 など

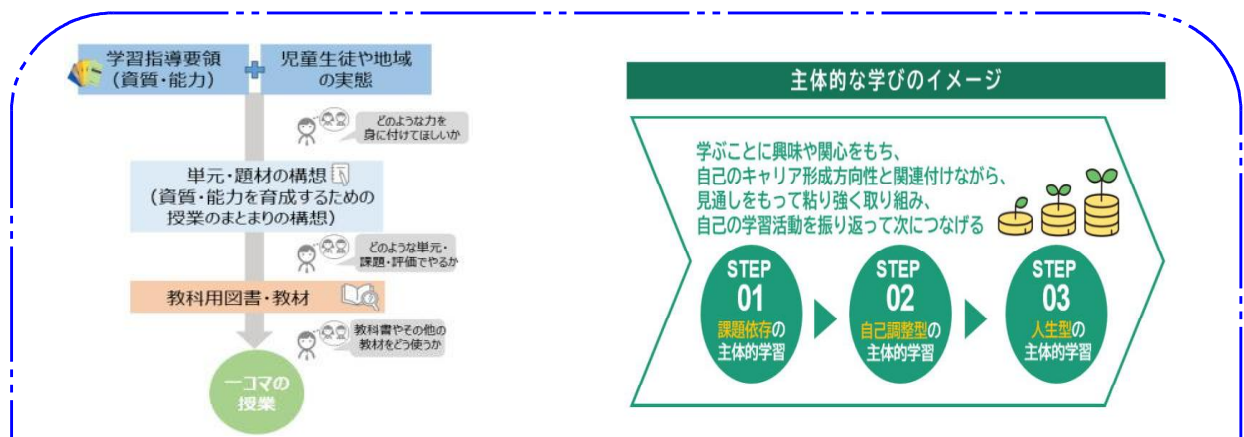
生徒にこれらの資質・能力を確実に育むためには不断の授業改善が重要であり、現行学習指導要領においては、生徒の学びの質に着目し、授業改善の取組を活性化していく視点として「主体的・対話的で深い学び」を位置付けている。

日々の授業において、生徒一人一人に「主体的・対話的で深い学び」を実現していくためには、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で目標とする資質・能力が育成できるよう、学習過程を意識して単元を設計していくという視点が重要であり、単元という一定のまとまりの中で、次に掲げるような時間を適切に設定することが不可欠である。

課題を設定する時間／見通しを立てる時間／個別に学ぶ時間／他者との対話を通じて学ぶ時間／学びを深める時間／学びを振り返ったりまとめたりする時間／生徒一人一人の苦手を補い得意を伸ばす時間 など

特に、主体的な学びについては、「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげること」が重要になる。

したがって、生徒が主体的に学ぶことができるよう、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、生徒が個々にじっくりと取り組んだり考えたりする場面と、教師が教える場面をどのように設定するかといった観点で、単元を組み立てていくことが考えられる。



【図1 授業づくりのイメージ】

【図2 主体的な学びと主体的な学習の深まり】

（「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のためのサポートマガジン『みるみる』」より抜粋）

（教育課程企画特別部会参考資料1－1

－「主体的な学習のスペクトラムについて」を基に作成）

また、OECDが推進しているプロジェクトの資料「OECD Future of Education and Skills 2030 ANTICIPATION-ACTION-REFLECTION CYCLE FOR 2030」においても、生徒が、「主体性」に近い概念の「生徒エージェンシー」を育むためには、見通し・行動・振り返り（AAR）のサイクルが、生徒の学習の理解を深め、視野を広げるという視点からも必要であると示されている。

こうした知見を踏まえると、「主体的な学び」を実現するためには、各教科・科目、総合的な探究の時間及び特別活動（以下「各教科・科目等」という。）において、次の点に留意して授業づくりを行うとともに、教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントという視点から年間指導計画や単元計画の作成が重要である。

＜「主体的な学び」を実現するための指導上の留意点＞

◎課題の設定においては、 <u>生徒が自分で課題を発見する過程を重視すること</u> (<u>探究的な学び</u> のレベルによっては教師が問いや課題を与えることもある)
◎1回の授業だけで主体的な学びは実現されないため、 <u>学習を見通し振り返る場面</u> を適切に設定し、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で実現すること
◎授業の方法や技術の改善のみを意図するのではなく、生徒に目指す資質・能力を育むために「 <u>主体的な学び</u> 」の視点で <u>授業改善</u> を進めること
◎各教科・科目等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の <u>質を向上させることを主眼</u> とするものであること

各教科・科目等のうち、特に総合的な探究の時間は、その本質が「探究の過程」にあることから、総合的な探究の時間を軸に各教科・科目の学習を関連付けるとともに、各教科・科目等においても、生徒が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断する学習過程を重視するなど、生徒の主体性や興味・関心を十分に生かすことが望まれる。併せて、生徒が自らの学びを意味付けたり価値付けたりして自己変容を自覚するために、振り返りの場면을学習過程に計画的に位置付けることが適切である。なお、生徒の主体性を生かした学習と教師の適切な指導が相まってこそ、より質の高い探究的な学びが実現されることは言うまでもないことである。

この「質の高い探究的な学び」に取り組む生徒は、授業において、次の割合が高い傾向にあると言われている。

＜質の高い探究的な学びに取り組む生徒の学びの姿＞

- ・課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。
- ・授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできる。
- ・自分の考えをまとめる活動を行っている。
- ・自分で学び方を考え、工夫できる。

こうした生徒の学びの姿は、生徒が主体的に学びを実現している姿に他ならない。主体的に学び、自らの人生を舵取りする力の育成や、多様で豊かな可能性を開花させる教育の実現を図るためには、生徒一人一人が初発の思考や行動を起こしたり、好奇心を深

掘りする中で、学びを主体的に調整し、自身の豊かな人生やよい社会につなげていく「質の高い探究的な学び」を目指して教師が授業づくりを行うことが不可欠である。

(3) 主体的な学びを実現するための指導の工夫①～課題の設定～

生徒の主体的な学びを実現するために、課題設定の工夫をしている好事例として、A高校の実践を紹介する。



【図3 A高校 Well-being共創プロジェクト全体図】

A高校では、「A高校 Well-being共創プロジェクト」を掲げ、学校全体で探究的な学習に取り組んでいる。本プロジェクトは、総合的な探究の時間を基軸として、3年間の学習を「HOP」、「STEP」、「JUMP」の3ステップで構成し、段階的に教育活動全体の学びが深まるようにデザインしている。

ステップ/時期	内容
【HOP】 自己と社会の関わりを知る 1年次の4月～11月	「探究ガイダンス」として、思考法・データ分析やプレゼン・アウトプットの方法、ヒアリング・インタビューの方法など、探究をするための基礎を学習する。その後、身に付けた探究の基礎を活用して、地域を舞台に「フィールドワーク」や「テーマ演習」を行い、「プロジェクト共創探究ゼミ活動」において、興味のある問いをもとに探究課題を設定する学習を行う。 ＜課題設定の工夫＞ 【HOP】 の段階では、探究活動への理解を深めるとともに、生徒が興味のある問いを設定し、その問いをもとに対象者を絞り、ヒアリングする活動を行う。
【STEP】 自己と社会を繋ぐ	「探究ことはじめ」として、個人探究の探究計画書の作成に挑戦する。「調査・研究・設計Ⅰ・Ⅱ」では、外部講師の講義を踏まえ、個人で行う探究のテーマについて熟考する過程を経て、探

1年次の12月 ～2年次の10月	<p>究活動の具体的な活動内容を想定しながら実践を進める。生徒は、自分の課題意識を確かめながら実践を進め、探究活動の集大成としての最終テーマを決定する。</p> <p><課題設定の工夫></p> <p>【STEP】の段階では、新たな問いを課題解決につながるような視点で設定し、探究計画書を作成して、さらにその問いを再考し、問いの精度を高め、自らの探究を深めていく。そして、その高めた問いをもとに【JUMP】に向けた「最終テーマ」を設定する。</p>
<p>【JUMP】</p> <p>社会に役立つ自己を表現する</p> <p>2年次の11月 ～3年次の7月</p>	<p>「探究のまとめⅠ・Ⅱ」として、ゼミに分かれて最終テーマについて探究を深める。ゼミ内発表、全体発表を行い、最終的に探究活動の成果を4,000字以上の論文やアイデアを形にした試作品などにまとめる。</p> <p><課題設定の工夫></p> <p>【JUMP】の段階では、自ら設定した最終テーマにもとづき、3年間の探究の集大成として探究の成果をまとめ、発表する。</p>

本プロジェクトのポイントは、課題設定までの段階的な取組である。1年次では、生徒が町で出会った人にインタビューを行い、「未来を創るヒト図鑑」を作成する。この取組を通して、フィールドワークにおける情報収集の方法、感じたことを人に伝えるようにまとめる方法、今後の探究活動につながる問いの設定の方法などを実践的に学び、生徒が主体的に課題を設定して探究活動を実践するための基盤となる資質・能力を育成している。

A高校では、このような一連の探究活動を通して、企業との連携の在り方を生徒が自ら考え、携帯電話のアプリケーションの開発や観光者向けの観光アイテムの開発につなげるなど、生徒が主体的な学びを実践する取組が効果的に展開されている。

(4) 主体的な学びを実現するための指導の工夫②～評価結果のフィードバック～

生徒の主体的な学びを実現するために、評価結果の還元の方法を工夫している好事例として、B高校の実践を紹介する。

B高校では、育成を目指す生徒像の一つである「自学と探究する力を持ち、主体的に地域共創へ参画し、新たな価値を創造していく生徒」の実現に向けて、第2学年及び第3学年において学校設定科目「地域デザイン」を実施している。「地域デザイン」では、地域の方々から地域の現状と課題を聞き、地域の多様な産業のよさに目を向け、他者と協働しながら自らの生活との関わりについて考察する学習を行う。また、地域の課題解決に向けて、生徒自身が「実行・検証・改善」を繰り返す学びを重視している。

【「地域デザイン」の年間指導計画(第2学年)】

	時	授 業	学 習 内 容
前期	1～2	オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・科目の目的及び意味を理解し、自分自身の活動としてスタートする心構えをもつ。 ・先輩の活動例を参考に、現時点での地域への興味・関心があるテーマを考える。 ・振り返りノートの記入方法を確認する。
	3～10	町の福祉・教育	<ul style="list-style-type: none"> ・町の保健福祉課、町教育委員会から町の福祉・教育の現状と課題を聞く。 ・ボランティア活動の参加者や子育て中の保護者と座談会を行い、現場の声を聞く。

			・ヒアリングの内容等を整理し、町が抱える課題解決の方策や自分たちで見付けた新たな課題を書き出す。
後 期	45～52	分野別グループ探究 (課題設定・事前調査)	・前期に学習したテーマの中から、自身の興味・関心に合わせて所属するチームを選ぶ。 (必要に応じてチームごとに2～3人の小グループを編成する。) ・チーム又は小グループごとに仮説を立て、テーマに関する理解を深めるために必要な情報を収集する。 ・仮説検証のために必要なフィールドワークを考える。
	53～56	分野別グループ探究 (フィールドワーク)	・目的を明確にした上で、フィールドワークを行い、仮説を検証する。
	57～62	分野別グループ探究 (まとめ・報告会準備)	・課題設定から仮説検証までの流れを踏まえて、発表のアウトラインを作成する。 ・発表のアウトラインをもとに、パワーポイント等で報告会資料を作成する。 ・自分たちの考えや想いが伝わるような発表を意識する。 ・報告会の前に別のチーム又は小グループと発表を見せ合い、ブラッシュアップを行う。
	63～66	分野別グループ探究 (報告会・振り返り)	・チーム内で小グループごとに報告会を行う。 ・積極的に質疑応答に参加する。 ・参加した地域の方から助言をいただく。 ・分野別グループ探究活動を振り返り、個人探究へどう活かすか考える。
	67～70	個人探究 (次年度の課題設定・活動 計画作成)	・分野別グループ探究をもとに、個人で地域の課題解決につながるテーマを設定する。 ・個人で仮説を立て、テーマに関する理解を深めるために必要な情報を収集する。 ・仮説検証のために必要なフィールドワークを考え、活動計画を立てる。 ・必要に応じてクラスメイトと現状報告を行いながら活動を進める。

B 高校では、「地域デザイン」の導入期において、生徒が探究活動の流れを確認し、学習活動の見通しをもつこととしている。その後、フィールドワークで得た情報を「ワークシート」に整理し、小グループごとに立てた仮説を検証する学習を設定している。こうした一連の学習過程を経ることにより、生徒が自らの学びの進捗や方向性を適宜確認しながら学習を進め、必要に応じて計画を立て直すことができるようにしている。

「教育課程企画特別部会における審議の状況について（令和 7 年 7 月 9 日第134回教育課程部会資料）」において、「学びに向かう力、人間性等」の要素の一つとして「学びの主体的な調整」が挙げられている。「学びの主体的な調整」とは、「自分の思考や行動を客観的に把握し認識（メタ認知）しながら学習を自己調整し、思考や行動を修正したり次の思考や行動につなげたりする力」と定義されており、B 高校の取組は、これに当たると考えられる。

【探究活動の流れと取り組む上での留意点】

テーマ設定	・漠然としたものではなく、具体的なものであるか
事前調査	・調べることが幅広くなりすぎていないか ・何を調べる時間なのか明確にできているか
仮説設定	・自分たちが検証可能な内容であるか ・何をどうやって検証するのか明確であるか
フィールドワーク	・実行していくとさまざまな課題が生まれても、目的を見失わず実行できるか
仮説検証	・結果についてしっかりと分析できているか
まとめ	・行動に対する分析結果をもとに、次のアクションを考えることができているか ・他者に取組の過程をしっかりと伝えられているか

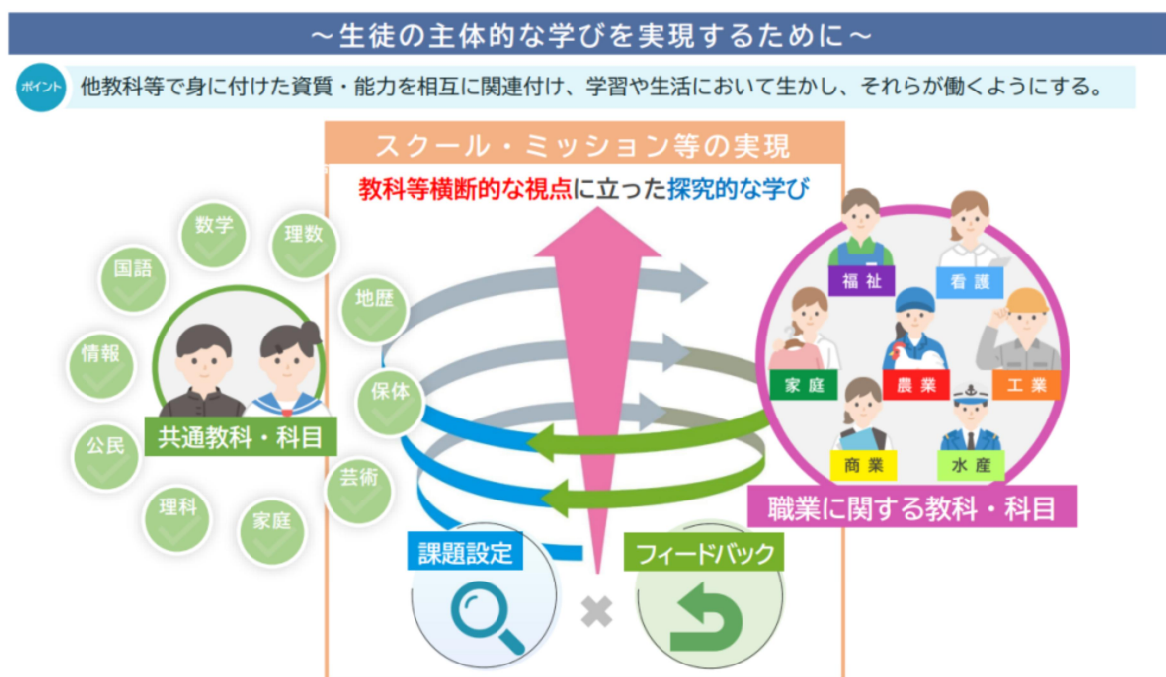
【分野別グループ探究におけるワークシートの例】

プロジェクト活動⑧ 仮説検証振り返りシート	
フォーム 名前	
プロジェクトテーマ プロジェクトで実現したい解決したいと考えていたことはなんですか（誰に対して、どんな変化をどのくらい生み出そうと考えていましたか）。	
仮説について、実際に実現・解決できたことはなんですか。仮説について、実際に違っていたことはなんですか。テーマに対して、個人で解決したことがあったことはなんですか。	
実現したい解決したいと考えていたことは、本当に実現するまで実現したものでしたか。当ではあるものにつづき、 ●実際に実現したい解決したいと考えていることはなんですか（誰に対して、どんな変化をどのくらい生み出したいですか）。また、それを実現・解決するためにどんな方法・アクションを試してみたいですか。 （はい ・ どちらともいえない ・ いいえ） 理由を教えてください。	

また、学習評価については、「学びに向かう力、人間性等」に対応する評価の観点として「主体的に学習に取り組む態度」が設定され、「粘り強さ」と学習の「自己調整」の視点から評価することとされている。学習評価は、生徒の学習改善につなげることが

重要であるが、そのためには、学習過程の途中で生徒一人一人のつまずきや伸びを評価し、その後の学習の改善や教師による指導の改善に生かす「学習改善等につなげる評価」の充実が不可欠である。特に、適切なタイミングでの分析と振り返りが重要である。

B 高校では、分野別グループ探究の報告会において、地域の方々から助言をもらうことで、これまでの探究活動を振り返り、評価結果を今後の個人探究に生かすようにしている。このように、学習過程の途中で評価結果を適切にフィードバックする機会を設定することで、生徒が自らの学びを振り返り、粘り強く学習を調整することを促している。



【図 4 課題設定やフィードバックを工夫した場合のイメージ】

2 課題対応能力を高めるキャリア教育

(1) 課題対応能力が求められる背景

少子高齢化、グローバル情勢、気候変動に伴う自然災害の激甚化、生成AIなどデジタル技術の発展といった大きな変化があいまって、社会や経済の先行きに対する不確実性が、これまでになく高まっており、未来の本道を担う生徒たちは、激しい変化が止まることのない時代を生きることになる。

こうしたことから、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性が増しており、異なる価値観をもつ多様な他者と、当事者意識をもって対話を行い、問題を発見・解決できる、「持続可能な社会の創り手」を育てる必要性が、これまで以上に高まっている。

(2) 課題対応能力の必要性

キャリア教育で育成を目指す基礎的・汎用的能力の一つに「課題対応能力」がある。「課題対応能力」とは、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。

この能力は、自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。また、知識基盤社会の到来やグローバル化等を踏まえ、従来の考え方や方法にとらわれずに物

事を前に進めていくために必要な力である。さらに、社会の情報化に伴い、情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

(3) 課題対応能力の指導の現状

次の表は、令和元年5月に国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが発行した『『キャリア教育』資料集－文部科学省・国立教育政策研究所－研究・報告書・手引編平成30年度版』に掲載されている高校を対象とした調査結果の一部抜粋である。

＜担任がキャリア教育を行う上で重点をおいて指導している項目＞

No	項目	よく指導している	ある程度指導している	あまり指導していない	指導していない
1	自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	32.8	54.0	12.4	0.8
2	起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること	16.5	54.7	26.6	2.2
3	学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	40.2	49.9	9.5	0.4
4	自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながら、その実現のための方法を考えること	41.9	49.8	7.7	0.6
5	自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善すること	34.3	53.6	11.6	0.5
6	上級学校や職場に関する情報を収集・活用すること	51.8	40.8	7.0	0.4
7	「進学したい学校」・「就職したい職場」を選び、その実現のために努力すること	64.2	33.2	2.4	0.2

単位（％）

調査結果のとおり、高校においては、項目7「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び、その実現のために努力すること」や、項目6「上級学校や職場に関する情報を収集すること」などは重点をおいて指導されている。一方で、基礎的・汎用的能力の課題対応能力につながる項目2「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」について肯定的に回答した割合は、全ての項目の中で最も低く、より積極的な指導が必要となっている。

(4) 学科の特質に応じて育成すべき課題対応能力

高等学校において、社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力を育成するためには、各学科の特色に応じた取組が必要となる。各学科において、基礎的・汎用的能力の一つである課題対応能力を育むためには、次のような視点が考えられる。

	普通教育を主とする学科	専門学科	総合学科
課題対応能力を育むための視点	具体的な課題を設定して行うディベートなどの学習を通じて、課題の本質を理解し、その課題を解決することができる力を育成する。	「課題研究」や「総合的な探究の時間」などの学習を通じて、様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立て、その課題を解決することができる力を育成する。	「総合的な探究の時間」などにおいて、課題解決のための道筋を立て、多様な他者の協力を得て課題解決を図る力を育成する。

(5) 課題対応能力を高めるキャリア教育の指導事例

ここでは、「地域の防災力を高めるための提案」をテーマに、教科等横断的な視点で、全校的に課題対応能力を高めるキャリア教育に取り組んでいる事例を紹介する。

【防災をテーマに選定した理由】

防災や環境問題は、共通教科はもとより、農業・工業・家庭・看護・福祉などの職業に関する教科にも関連付けしやすく、地域とも連携しやすいテーマであるため。

ア ねらい

- (ア) 自然災害の種類やその災害が起こるメカニズム、減災に必要なとなる知識を身に付ける。
- (イ) 安全を確保する行動の開始を適切に判断し、より安全な行動を選択する判断力を身に付けるとともに、話し合い・発表・実践を通して、課題対応能力・コミュニケーション力を身に付ける。
- (ウ) 家庭及び学校や地域社会の安全活動に進んで参加し、「共助」の主体となって貢献できる力を身に付けるとともに、将来の仕事や社会との関わり方を考えるきっかけにする。

イ 活動の流れ（全10回）

回数	内容	活動詳細	想定する教科	ポイント
1 2	防災課題の理解と課題設定	・地域の災害リスクや防災体制を調査 ・グループで話し合い、課題を決定	・地理歴史科 ・公民科	地域データや新聞記事を活用
3 4	科学的背景の学習と情報収集	・地震や洪水の仕組み、災害の科学的要因を学ぶ ・グループで課題に関連した情報収集を開始	・理科（物理・生物・地学） ・情報科	GIS（地理情報システム）やインターネットも活用
5 6	解決策の立案	・各グループで防災対策や啓発策を検討 ・提案書及びプレゼンテーション資料の作成開始	・国語科（文章作成・発表練習） ・家庭科（実践提案） ・情報科（資料作成）	他者の意見から気付きを得る
7 8	発表準備とリハーサル	・プレゼンテーションの練習 ・フィードバックを受け改善 ・防災グッズの製作等	・全教科連携	発表力向上を意識
9 10	発表・実践・振り返り	・学校や地域で発表 ・防災グッズの展示や啓発活動を実施 ・振り返りシート記入	・全教科連携	キャリア教育としてのまとめを意識

ウ 指導のポイント

- (ア) 難しい言葉を使わず、自分の言葉で話し合うことを大切にする。
- (イ) 生徒の興味・関心を高めるため、防災グッズの製作や展示など、体験的な学習を積極的に取り入れる。
- (ウ) 発表の場を設けて、自分の意見を多くの人に伝える機会を創出する。
- (エ) より深い学びの実現に向け、リアルな話を聞くことができる地域の人や専門家とつながる機会を創出する。

エ 期待される生徒の変容

- (ア) 自信をもって発言・行動できるようになる。
- (イ) 自分の意見と他者の意見を尊重して対話ができるようになる。
- (ウ) 挑戦する姿勢が身に付き、失敗から学べるようになる。
- (エ) 進路について前向きに考えるようになる。
- (オ) 「どうせ無理」から「やってみよう」への思考の転換が見られる。

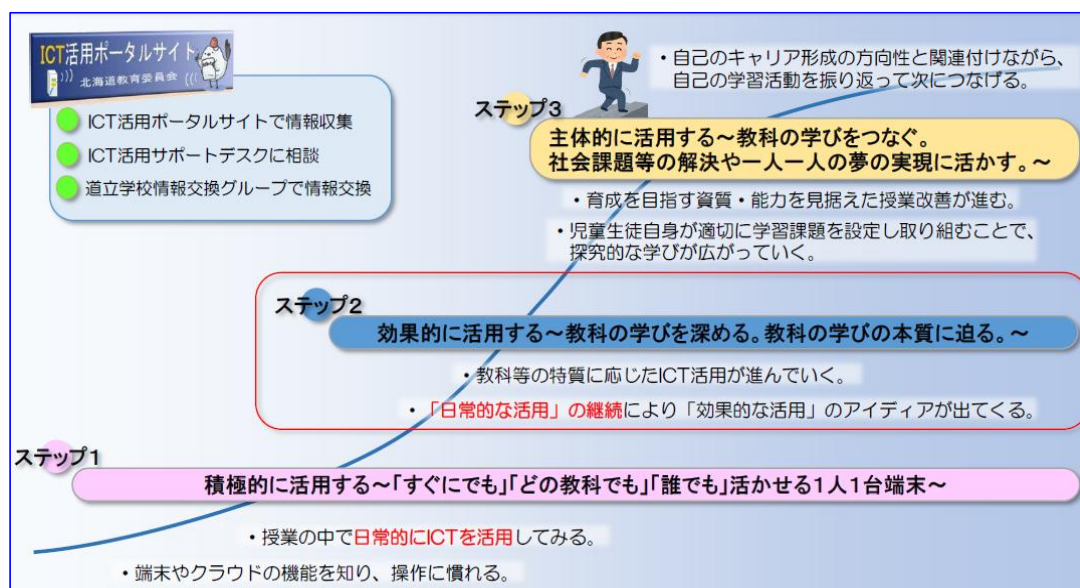
3 ICTを活用した学習活動の一層の充実

(1) ICT活用の充実

学校における創意工夫により各教科等でICTを活用した学習活動が展開されているが、今後は、これまでの端末活用を促進するというフェーズから、端末活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するフェーズへと軸足を移していくことが求められており、教科の学びを深め、教科の学びの本質に迫る授業においては、1人1台端末や汎用的なクラウド、生成AIサービス等を効果的に活用し、生徒の資質・能力の育成を図っていく必要がある。

北海道教育委員会では、ICTを活用した学習の段階的な導入について、生徒が活用する視点（情報活用能力の育成）と教員が活用する視点（ICT活用指導力の向上）を三つの段階に分けて提示している。（※図5参照）

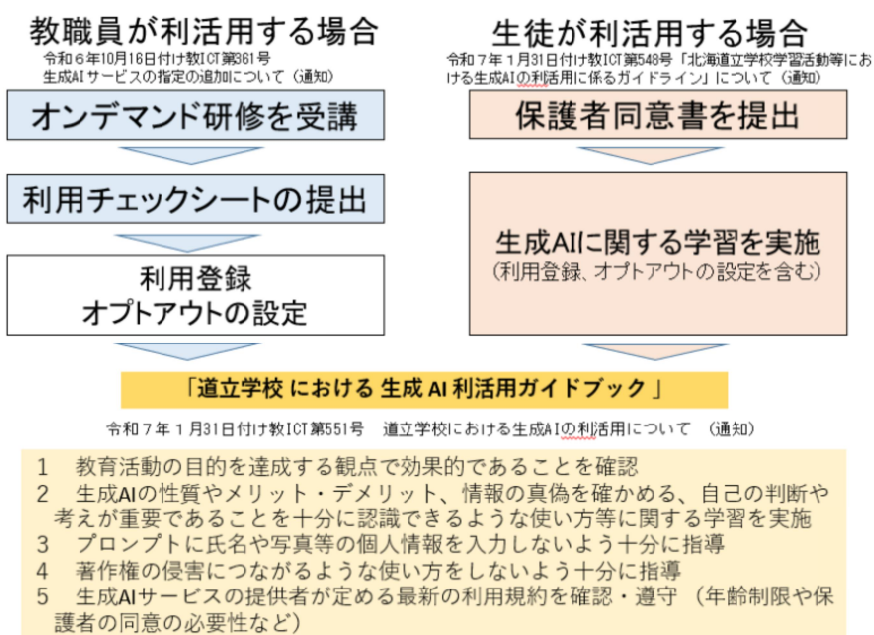
ステップ2の段階にある学校では、多様な生徒を包摂する実践が推進されるとともに、多様な教材の活用や思考過程の可視化などにより、個別最適な学びと協働的な学びが促進され、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が進められていることから、全ての学校でステップ2を実現できるようにする必要がある。さらに、ステップ2を実現した学校においては、教科の学びをつなぎ、社会課題等の解決や生徒一人一人の夢の実現に活かすステップ3の段階を目指すことが求められている。



【図5 ICTを活用した学習の段階的な導入】

(2) 生成AIの利活用

近年、生成AIをはじめとしたAI技術は、かつてないスピードで社会に普及し、既に一定数の生徒が何らかの形で生成AIに触れていると考えられる。今後、各学校においては、生成AIを使いこなすための力を各教科等の中においても意識的に育てていくという姿勢が重要であるとともに、生成AIがさらに社会生活に組み込まれていくことを念頭に置き、発達の段階や各学校段階、地域の実情等を踏まえつつ、情報モラルを含む情報活用能力の育成を一層充実させる必要がある。

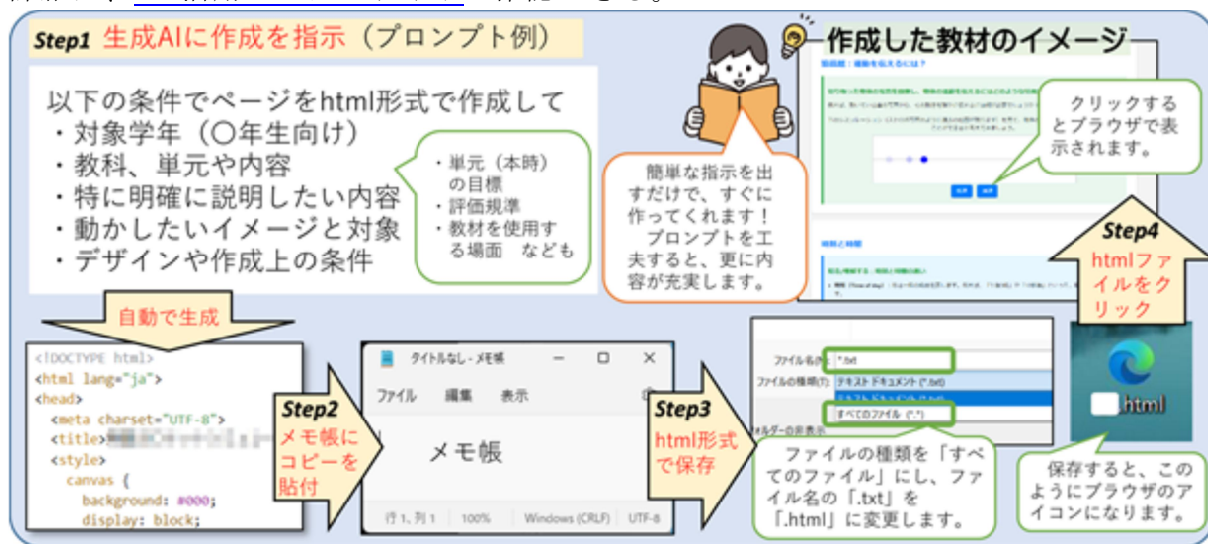


【図6 生成AIを利活用するための手順】

道立学校における生成AIの利活用に当たっては、教職員が利活用する場合と生徒が利活用する場合で、それぞれ上記のとおりの手順を踏むこととしている。（※図6参照）

どちらの場合も利用登録後に、オプトアウト設定（入力した指示文（プロンプト）の内容を生成AIの機械学習に利用させない設定）をした上で、利用条件を遵守して利活用すること（※詳細は、「[道立学校における生成AI利活用ガイドブック](#)」を参照）が重要である。

また、北海道教育委員会では、生成AIを利活用した授業準備の効率化に向けた取組として、下図のような教材作成の手順や作成上の留意点等を紹介している（※図7参照）。詳細は、ICT活用ポータルサイトで確認できる。



【図7 生成AIを活用してhtml形式の教材を作成する方法】

なお、生徒の学習活動において生成AIを利活用する場面としては、グループの考えをまとめる、アイデアを出す活動の途中段階で、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見付け議論を深める目的で活用したり、英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や生徒一人一人の興味・関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したり、生徒のアイデアを実現するためのプログラムの制作に活用したりするなど、様々な場面が考えられる。（※図8参照）

Box-5. 学習場面において利活用が考えられる例、不適切と考えられる例
<p>（利活用が考えられる例）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 情報モラル教育の一環として、生成 AI が生成する誤りを含む出力を教材に、その性質や限界に気付く ・ 生成 AI をめぐる社会的議論について児童生徒が主体的に考え、議論する過程で、その素材として活用する ・ グループの考えをまとめる、アイデアを出す活動の途中段階で、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見付け議論を深める目的で活用する ・ 英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や一人一人の興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したりする ・ 外国人児童生徒等の日本語学習や学習場面での補助のために活用する ・ 生成 AI の利活用方法を学ぶ目的で、自ら作った文章を生成 AI に修正させたものを「たたき台」として、自分なりに何度も推敲し、より良い文章として修正した過程・結果をワープロソフトの校閲機能を使って提出する ・ プログラミングの授業において、児童生徒のアイデアを実現するためのプログラムの制作に活用する ・ 生成 AI を利活用した問題発見・課題解決能力を積極的に評価する観点からパフォーマンステストを行う ・ 教科書等の内容を児童生徒それぞれの進度に合わせて理解するために、解説やイメージを出力し、より内容に対する深い理解を生み出す助けとする <p>（不適切と考えられる例）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生成 AI 自体の性質やメタ・デマンドに関する学習を十分にに行っていないなど、情報モラルを含む情報活用能力が十分育成されていない段階で、自由に使用する ・ 各種コンクールの作品やレポート・小論文等について、生成 AI による生成物をほぼそのまま自己の成果物として応募・提出する（コンクールへの応募を推奨する場合は応募要項等を踏まえた十分な指導が必要） ・ 詩や俳句の創作、音楽・美術等の表現・鑑賞など、感性や独創性を発揮させたい場面、初発の感想を求める場面等で安易に使わせる ・ テーマに基づき調べる場面などで、教科書等の質の担保された教材を用いる前に安易に利用する ・ 教師が正確な知識に基づきコメント・評価すべき場面で、教師の代わりに生成 AI の出力のみに頼る ・ 定期考査や小テスト等で使わせる（学習の進捗や成果を把握・評価するという目的に合致しない。CBT で行う場合も、フィルタリング等により、生成 AI が使用し得る状態とならないよう十分注意すべき） ・ 児童生徒の学習評価を、教師が判断せずに生成 AI からの出力をもって行う ・ 教師が専門性を発揮し、人間的な触れ合いの中で行うべき教育指導を実施せずに、生成 AI のみに相談させる

【図8 初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）文部科学省】

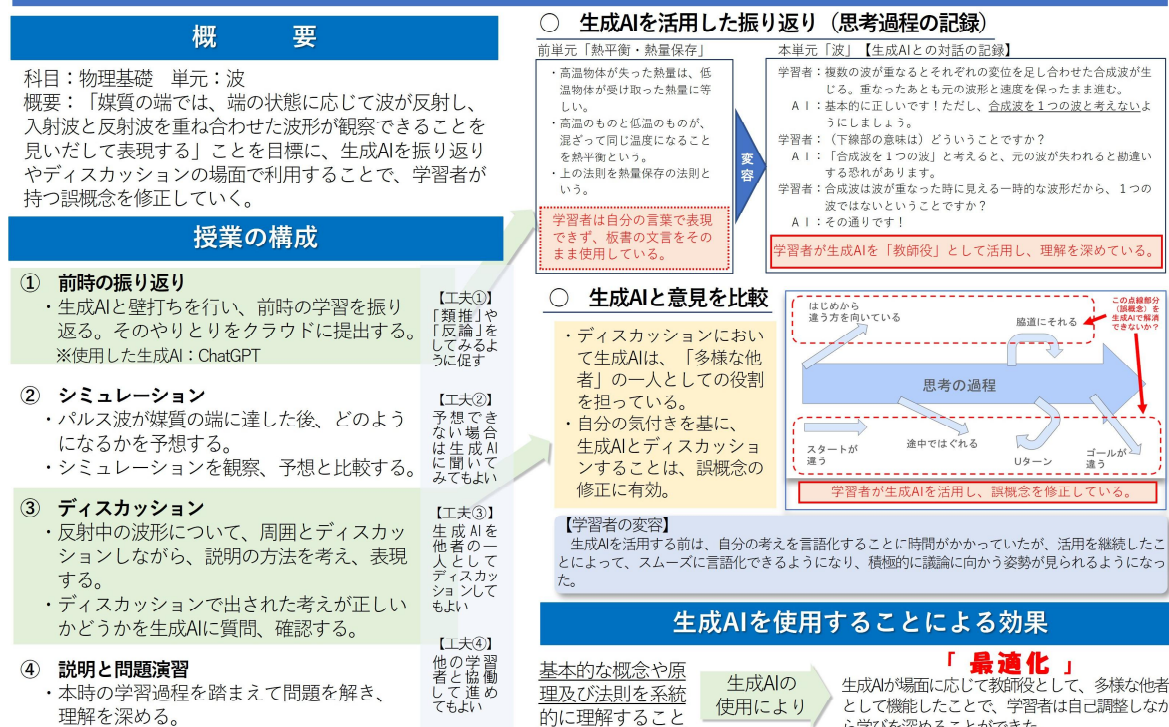
次に示すのは、令和6年度に生成AIパイロット校（文部科学省）の指定を受けていた帯広柏葉高校の取組である。

美術では、生徒が制作した作品を生成AIに学習させ、生成AIと対話しながら改善点を見いだすなど、作品を修正していくために生成AIを活用している（※図9参照）。



【図9 生成AIを活用した授業の実践事例（帯広柏葉：美術）】

また、物理基礎では、前時の授業の振り返りを生成AIとの対話で行ったり、ディスカッションで出た考えを生成AIに学習させ正しいかを確認したりするなど、理解の深化や誤概念の修正のために、多様な他者の一人として生成AIを活用している（※図10参照）。



【図10 生成AIを活用した授業の実践事例（帯広柏葉：物理基礎）】

学習活動における生成AIの利活用については、生徒の発達の段階や情報活用能力の育成状況に十分留意しつつ、リスクや懸念への対策を講じた上で利活用を検討することが重要である。なお、利活用の可否の判断の際は、学習指導要領に示す資質・能力の育成につながるか、教育活動の目的を達成する観点で効果的であるかを確認することが必要である。

4 北海道公立高等学校（中等教育学校後期課程含む）令和7年度（2025年度）入学者教育課程編成の状況（注：中等教育学校は、全日制課程普通教科に関する学科に含めている。）

○資料1

「学校設定科目」の設定状況（全日制）

年度 \ 課程・学科	全日制課程 普通教科に関する学科	全日制課程 総合学科	全日制課程 専門学科
令和7年度	146校	17校	59校
令和6年度	149校	17校	60校

○資料2

「学校外における学修の単位認定」の状況

	海外留学	学校間 連携	大学、 高専、 専修等	技能審 査の成 果	ボラン ティア 活動等	高卒認 定試験	定通併修
全日制課程普通教科に関する学科	47校	8校	36校	78校	31校	4校	0校
全日制課程総合学科	8校	7校	12校	17校	11校	2校	0校
全日制課程専門学科	12校	2校	19校	42校	18校	2校	0校
定時制課程普通科	6校	4校	4校	21校	14校	17校	13校
定時制課程専門学科	2校	3校	2校	13校	3校	5校	2校

○資料3

「類型を設定している学校（全日制）」の状況

	第1学年から	第2学年から	第3学年から
普通教科に関する学科	1校	45校	16校
専門学科	1校	24校	8校

○資料4

「履修と修得を分離している学校」の状況

	全日制課程 普通教科に関する学科	全日制課程 総合学科	全日制課程 専門学科	定時制課程 普通科	定時制課程 専門学科
校数	91校	17校	35校	12校	5校

○資料5

「学期の区分ごとの単位修得の認定を行っている学校」の状況

	全日制課程 普通教科に関する学科	全日制課程 総合学科	全日制課程 専門学科	定時制課程 普通科	定時制課程 専門学科
校数	52校	14校	14校	4校	3校

○資料 6

「2 学期制を実施している学校」の状況

	令和 7 年度	令和 6 年度	令和 5 年度	令和 4 年度
全日制課程	1 9 8 校	1 9 5 校	1 9 5 校	1 9 4 校
定時制課程	3 6 校	3 5 校	3 4 校	3 4 校

5 北海道高等学校「学習状況等調査」・「C B A 学力テスト」等のエビデンスに基づいた授業改善

(1) 「学習状況等調査」及び「C B A 学力テスト」の概要

道教委では、これからの時代に求められる資質・能力のうち、国語・数学・英語の各教科に係る知識及び技能が習得され、思考力、判断力、表現力等が身に付けられているかを把握するとともに、本道の小学校及び中学校で実施している「ほっかいどうチャレンジテスト」や「全国学力・学習状況調査」の結果を踏まえ、小中高の連続性を意識した授業改善等に向けた取組の推進を図ることを目的として、道立高等学校の第 1 学年(中等教育学校は 4 年次、定時制は第 1、2 学年)を対象に、「学習状況等調査」及び「C B A 学力テスト」を実施している。

「学習状況等調査」では、「全国学力・学習状況調査」との関連を考慮しながら、各教科の学習に対する意欲や日頃の学習時間、学習状況等に係る質問項目を設定し、調査を行っている。「C B A 学力テスト」では、国語・数学・英語の各教科において、生徒の進路等をもとに設定した三つのモデルから、各学校が生徒の実態に応じて選択し、学力テストを実施している。

「学習状況等調査」及び「C B A 学力テスト」の結果については、[道教委（学力向上推進課）ウェブページ](#)に掲載しているので、各学校における授業改善の取組の充実に向けて活用いただきたい。

表 公立高等学校（札幌市立高等学校を除く。）の実施校数

○ 学習状況等調査

	全日制	定時制	合計（のべ）
道立高等学校	187校	13校	200校
市町村立高等学校 （札幌市立高等学校を除く。）	16校	6 校	22校

○ C B A 学力テスト

	コアアビリティモデル （Cモデル）	ベーシックモデル （Bモデル）	アドバンスモデル （Aモデル）
国語	165校	55校	16校
数学	170校	51校	16校
英語	165校	55校	15校

※複数のモデルを選択している学校があるため、合計数は一致しない。

(2) 全道の傾向と分析

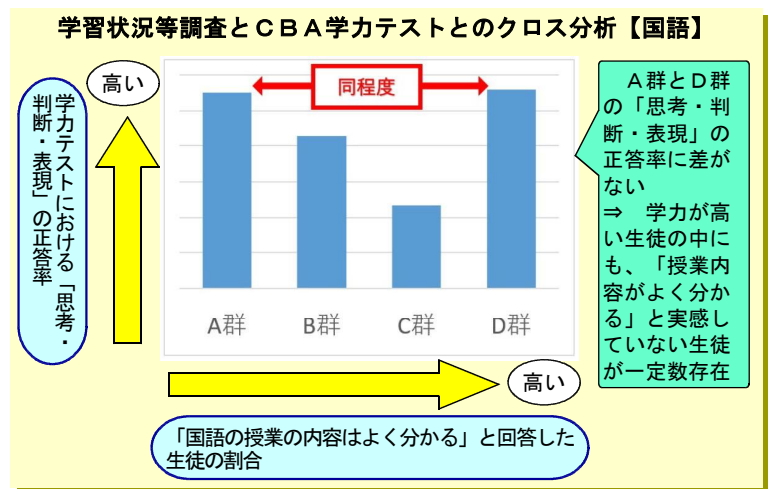
学習状況等調査から分かる国語、数学、英語の授業の理解度等の傾向と、C B A 学力

テストにおける各教科の観点別の正答率のクロス分析の結果や、その結果から考えられる学習指導上の課題及び改善の方向性について次に示す。

ア 国語

学習状況等調査において、「国語の授業の内容はよく分かる」との質問に対して「当てはまる」と回答をした生徒は20%を超えている。

右の図は、「国語の授業の内容はよく分かる」の質問に対して「当てはまる」と回答した生徒の割合が低い学校から順にA群、B群、C群、D

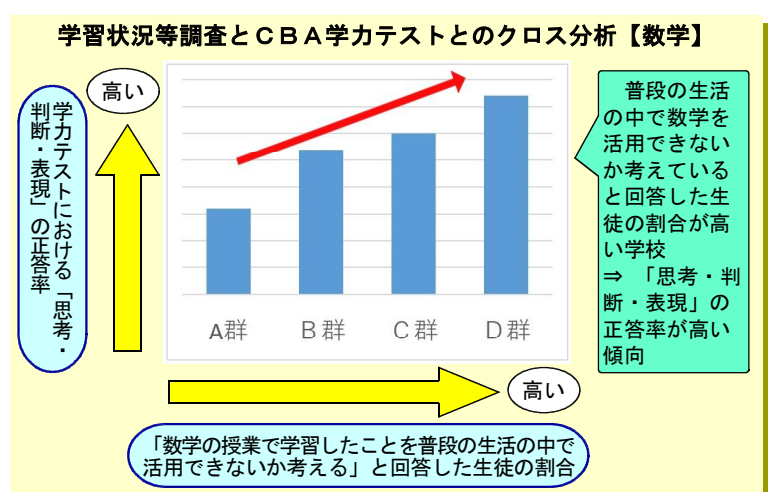


群のグループに分け、グループごとの学力テスト（Aモデル）における「思考・判断・表現」の正答率をグラフで示したものである。図からは、「授業の内容がよく分かる」と回答した生徒の割合が低いA群と高いD群とでは、学力テストの「思考・判断・表現」の正答率に大きな差はないことが分かる。このような結果となった原因については、今後詳細な分析が必要であるが、国語の授業において「分かる」と「できる」ことの間には乖離があることが考えられる。

各学校においては、教材「を」教える授業ではなく、教材「で」国語の資質・能力を身に付けさせる授業を一層推進することが重要であり、生徒自身が、国語の授業を受けて「何ができるようになったか」を実感できるよう、授業改善を行う必要がある。

イ 数学

学習状況等調査において、「数学の勉強は好きだ」、「数学の授業の内容はよく分かる」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒はともに20%を超えている一方、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒は11.9%となっており、数学を日常生活や社会における場面で活用しようとする態度に課題が見られる。



数学を日常生活や社会における場面で活用しようとする態度に課題が見られる。

右上の図は、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒の割合が低い学校から順にA群、B群、C群、D群のグループに分け、グループごとの学力テスト（Bモデル）における「思考・判断・表現」の正答率をグラフで示したものである。図からは、普段の生

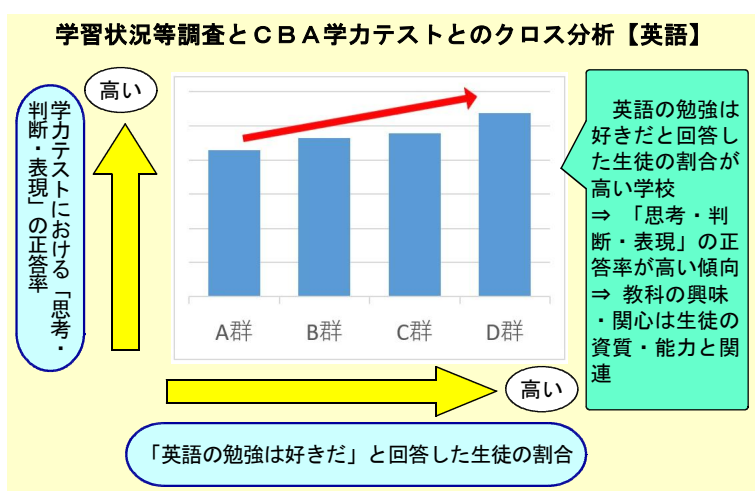
活の中で数学を活用できないか考えていると回答した生徒の割合が高い学校では、「思考・判断・表現」の正答率が高い傾向（A、Cモデルも同様の傾向）となっていることが分かる。

数学では、数学的活動として捉える問題発見・解決の過程において、基本的な概念や原理・法則に基づく知識及び技能を、日常生活や社会の事象などの考察に生かすよう配慮することが大切である。各学校においては、課題学習のみならず、通常の授業においても、日常生活や社会の事象などを数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察するといった「日常生活や社会の事象の数学化」を学習過程に取り入れるなどの授業改善を図り、生徒の思考力・判断力・表現力等の育成につなげる必要があると考えられる。

ウ 英語

学習状況等調査において、「英語の勉強は好きだ」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒は20%を超えている。

右の図は、「英語の勉強は好きだ」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒の割合が低い学校から順にA群、B群、C群、D群のグループに分け、グループごとの学力テスト（Bモデル）における「思考・判断・表現」の正答率をグラフで示したものである。



右の図は、「英語の勉強は好きだ」との質問に対して「当てはまる」と回答した生徒の割合が低い学校から順にA群、B群、C群、D群のグループに分け、グループごとの学力テスト（Bモデル）における「思考・判断・表現」の正答率をグラフで示したものである。英語の勉強は好きだと回答した生徒の割合の高さに比例して「思考・判断・表現」の正答率が高い傾向（A、Cモデルも同様の傾向）となっていることが分かる。このことから、教科に対する興味・関心は、資質・能力の向上に関連すると考えられる。

各学校においては、生徒が自ら意見や考えを発信したり、コミュニケーションを取ったりしたいと思うようなテーマの言語活動を行ったり、ALTの活用やオンラインによる遠隔地との交流の機会を設けたりするなどして、生徒の興味・関心を高める工夫を行う必要があると考えられる。

(3) エビデンスに基づく授業改善の取組を推進するための方策

道教委では、各学校が生徒の学力や学習状況等のエビデンスに基づき、授業改善の取組の明確化・重点化を図り、検証改善サイクルの確立による組織的な授業改善を推進することができるよう、次の資料等を作成しているのので、各学校における授業改善の取組の充実に向けて活用いただきたい。

ア 「学習状況等調査」分析シート及び「CBA学力テスト」集計分析シート

「学習状況等調査」分析シートを活用して、生徒の回答結果を校内で共有するとともに、学校の強みと弱みを分析し、自校の教育活動の改善のための方策を検討するなどして、授業改善に向けた校内体制の整備を図ることが考えられる。

○ 全道平均、他項目、学校の見立て等と比較して、比較的結果がよいと考える項目（強み1）

質問項目	回答状況	
3-(2) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。（学校の授業の予習・復習を含みます）	よくしている・ときどきしている	あまりしていない・全くしていない
	本校 62.4 %	本校 37.6 %
	(前年度) 57.9 %	(前年度) 42.1 %
	全道 46.3 %	全道 53.7 %
<p>学校が強み（又は弱み）と捉えた質問項目について、回答状況を分析し、教育活動の充実のための方策を検討</p> <p>教科担任が学期始めや単元の導入時に、学習計画の立て方などについてガイダンスを行うとともに、HR担任が定期的に個人面談を行い、生徒の学習状況を把握して指導していることが影響していると考えられる。</p> <p>学習計画表やPDCAサイクルシートなど、各教科共通のフォーマットを作成し、授業や単元ごとに振り返りを行うことを全校で実施する。生徒が自分の学習の状況を的確に把握し、課題を見つけ、改善策を自ら考えることができるようにするなど、学習指導の改善を図る。</p>		

図 北海道高等学校「学習状況等調査」結果に係る「本校の強み・弱み」分析シートの記載例（一部）

また、「CBA学力テスト」における集計分析シートは、全道集計の結果や自校の結果を入力することで、観点・領域別、問題別の成績個票を作成することや、年度別の正答率を問題ごとに比較することができる。こうした資料を用いて、生徒との面談を実施したり、各教科の観点・領域別の課題を踏まえた授業改善に役立てたりすることが期待される。

イ 公立高等学校入学者選抜状況報告書

本報告書では、出願者の状況などに加え、各教科の学力検査問題の分析を行い、教科ごとに義務教育段階の学力調査等の傾向や課題を踏まえた特徴的な問題を掲載するとともに、今後の授業の在り方に係る授業実践例（右図参照）を掲載している。

各学校において、本報告書を活用して、学力検査の結果分析により入学者の学力の実態把握を行うほか、中学校における実践を参考にして、義務教育段階の学びを踏まえた授業改善に取り組むことが期待される。

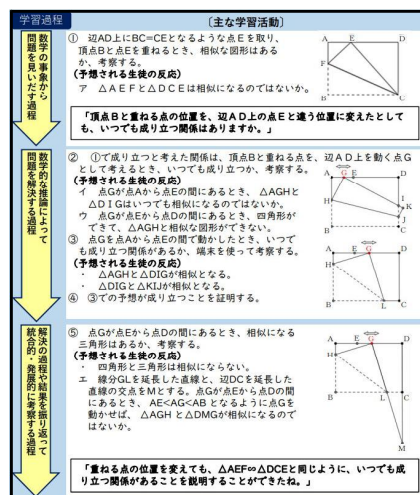


図 令和7年3月実施「公立高等学校入学者選抜状況報告書」の授業実践例（一部）

Topics

授業改善ポータルサイト「Edu Portal」

道教委の関係課が作成する授業改善に係る参考資料を一元的に提供する授業改善ポータルサイトを開設しました。各学校において、本ポータルサイトを活用して、小中高12年間を一体的に捉えた授業改善や学力向上に向けた取組を推進するようお願いします。

ポータルサイトの内容



アクセスから資料の活用までの流れ

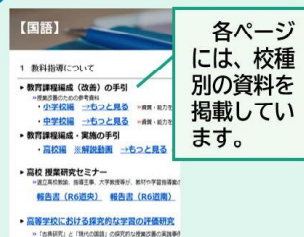
STEP 01 サイトにアクセス！



STEP 02 教科等又はカテゴリーから選択



STEP 03 サイト内にある授業改善に係る参考資料を入手



各ページには、校種別の資料を掲載しています。